

い。最初は患者が少なかったが、徐々に増えてきた。

私の長男は、日本の高校と専門学校を卒業して横浜で就職した。次男は、日本大学工学部を卒業し、社会人として一生懸命働いている。私も鍼灸治療院を経営しながら、非常勤講師として尚志高等学校で中国語を教えている。妻も鍼灸師の免許を取得し、一緒に東洋医学を研究している。生活は裕福ではないが、自立して充実した生活を送っている。

養母施桂蘭は一九九一年五月八日他界、享年六十九歳であった。私は養母の温情を決して忘れない。毎年五月八日には、養母の遺影の前に花と線香を欠かさない。また、同時に中国人民の温情も決して忘れない。

私の両親は日本人であるが、育ててくれたのは中国人の養父母である。父は、私が生まれたときに当時の在満州国日本大使館に出生届を出していたので、私には日本の戸籍があった。しかし中国で生まれ、中国で四十年余の間生活してきたので、日本人よりも中国人だった。中国語が母国語だ。私は、中国では日本人だと言われ、日本に帰っては中国人だと言われた。だが

私は中国人であろうが、日本人であろうが、全然気にしない。私は国際人になりたいから、中国人と日本人、それぞれの優れた点を身につけたい。そして、今後とも平和な日中友好の懸け橋になりたいと願っている。日中両国人民の世々代々の友好のために、微力ながら貢献したいと日夜願っている。

〔編注〕

立花薫さんの父親である立花開さんの手記「一族あげての開拓団の果ては」が「平和の礎―海外引揚者が語り継ぐ労苦III」に掲載されています。

運命の半生

福島県 立花悦子

一、私の生い立ち

私は、福島県の大槻という静かな町で、立花開の長女として昭和十五（一九四〇）年五月二十日に生まれ

た。まだあの悲惨な大戦争も始まっていない平和なときだった。しかし父は当時、満蒙開拓第九次福島県集団の一員として、満州で働いていて家にはいなかった。母は、お産のために父と別れて福島に戻って私を生んだのだった。

その年の秋に、父は家族を連れに戻ってきた。私には記憶がないが、家族一緒に汽車や船を乗り継いで朝鮮に渡り、そこから朝鮮半島を北上して満州に入り、三江省富錦県の筆架山の開拓団部落に落ち着いた。それから数年、物心がつく頃までこの部落で生活をした。

北滿の冬は、言葉では言い表すことのできないくらいに寒さが厳しいので、オンドルの部屋で炬燵こたつに入って絵本を見たり、福島から送ってきたおもちゃなどで遊んでいたことを臚あやげながら覚えていた。

お正月には、父と母でお餅をついていたことも、断片的ではあるが思い出す。父は、狩猟が得意だったので、よく山に入りノロを撃ち止めてきて、その肉をたくさん食べたことも思い出される。両親が野良仕事に

出るときは、私たちが外に出られないようにして行くので、窓のすき間から外を見て両親の帰ってくるのを心待ちしていたものだった。白い石を見付けて土間でカチカチと擦り合わせると青白い火花が飛び散るので、面白がって遊んでいて怒られたこともあった。

気候が良くなると、窓の周りはいろいろな草花でうずまってしまい、風が吹くとよい香りが家の中まで入ってきた。父母の苦勞は全然分からずに、本当に幸福いっぱいな生活であった。あのころが、我が家にとっても私にとっても一番幸せなときで、一生忘れられない。

二、父の思い出

人生で一番楽しく、一番幸せなことは、家族一緒に暮らすことだろう。父はいつも「悦子、悦子」と呼んで、かわいがってくれた。昭和二十年五月、その父に召集令状がきて兵隊に行った。出発する日の朝、母は、子供三人を連れて見送りに行った。それが父との半生の別れであった。父が出征した当時は、寂しくて道を通る人や、馬車の通るたびに、そこに父がいない

かと捜していたそうである。

私は、小さいころにはおにぎりが好きで、父が作ったたくあんやキュウリの浅漬けと一緒に食べるのが何よりもおいしかった。父が出征していなくなると、それらのものも食べられなくなった。そのころはまだ、出征とか軍隊とかはよく分からないので、どこかに連れて行かれたような感じで、寂しくてしょうがなかった。父が不在でも、家には親せきの者や、近所の満人や、父の友人の中国人が、しょっちゅう出入りしていたのでにぎやかではあったが、それでも父のいないことが、いつまでも寂しかった。

三、敗戦と避難行

そのうちに母は、開拓の仕事が忙しくなり、母一人で三人の子供の世話もなかなか難しくなったので、一番年長の私は、筆架山開拓団からちょっと離れている開拓団にいる祖父母の家に預けられた。私は敗戦の後をこの家で過ごした。何が何だかよく分からないうちに、この祖父母の家も、筆架山の家にも、避難命令が出て、出発準備に追われるようになった。ソ連軍が

東満国境から不法に侵攻してきて、戦争を起こしたと
のことだった。

それからの私の運命は逆転した。祖父母一家と共に
綏化スイカに向かつて避難した。母の方とは連絡を取り合っ
ていたので、綏化飛行場の格納庫に收容されたときに
無事に再会することができた。綏化で母と会うまでの
ことは、あまり記憶にない。環境の激変で気も転倒し
ていたのだろう。祖父母の家を出るときに、いろいろ
な花が美しく咲いていたことと、それぞれに家には、
収穫物が豊富に取り入れられていたが、それをそのま
ま置いて出て行くことが惜しくて悲しかったことだけ
が、その後になって記憶に戻ってきた。

昭和二十年の冬の訪れの前に、奉天ホウテン（瀋陽）の難民
收容所に收容された。そこは以前、日本人の国民学校
（春日国民学校）だった。食べる物も少なく寒さがい
わじわと迫ってきて苦しい毎日だった。そのうえに、
祖父や生まれたばかりの妹が、発疹チフスにかかり
次々と死んでいった。毎日多くの人が、同じような運
命をたどっていた。死人があっても丁重に弔うことは

できなかった。

四、避難中の母の思い

避難中における母のことを忘れることはできない。

奉天難民收容所での厳冬の生活は大変だった。まず何といつても食べることは、自分たちの力でしなければならぬ。母は寒い中を、私たち姉弟を連れて中国人の家に行き、何でもよいから食べる物をもらいたいと言つて歩き、少しばかりの高梁コウライヤンを手に入れると大事に持つて帰り、その高梁をコンクリート造りの洗面台の上で手でこすり、それを水分を多くして炊き、朝夕の二食に分けて食べた。いくら炊いても堅いので私は下痢をしてしまった。また、じゃがいもや人参の漬物だけを食べたこともある。弟は、腹が空いたと言つて聞きわけもなくよく泣き通すので、母も随分と困つていた。そんなとき空腹を少しでも紛らわすために母は、弟に絵本を読んで聞かせていた。その絵本は、「男の人が前を歩き、母親が子供の手を引いて後から歩いて行く」という絵で、本当に寂しい気持ちになつた。私はその絵本を見るたびに、父が出征していくと

きのようだと、父を思い出したものだった。母もそんな気持ちになつていたようで、弟に読んで聞かせながら、人に見られないように涙を流していた。

ある日、母は「ちょっと出掛けてくるから」と言つたまま、私たちを残して一人で出て行つたが、夜になつても帰つてこない。ついに私も泣き出し、それにつれて弟も大声を出して泣いた。母は、何をしにどこに行つたのかも分からない。そのうちに母は、疲れたような顔をして戻つてきて、私と弟を抱き寄せて三人で泣いた。後で考えると、そのとき母は自殺をするつもりで出て行つたが、子供のことを考えるとなかなか実行がでずに、そのまま夜になつて戻つてきたのではないかと思つた。

そんなことがあつた後は、私は、母がどこに出掛けるにも、「お母さん！」と呼んで母の手をつかんで離さなかつた。子供心にも、母が帰つてこなければ大変だと思つていたのである。私は、寒さ厳しいときでも、履く物もないのはだして外を歩いてしたが、それでも構わずに母について回つた。便所に行くにも母

から離れなかった。母しか頼る人がいなかったからだ。

食べ物もなく、だれもが自分が生きることだけで精いっぱい、人を助けるなどということはできなかったし、また、助けてくれる人もいない。ただ、望みは父が兵隊からここに元気で帰ってくることでだけだった。着の身着のままの避難だったので、この寒さに満足に着る物もない。そんな中でも親切な人もいた。ある日、母は私たちを連れて奉天に住んでいる日本人の家に行った。その人は、自分たちも毎日の生活に困難しているのに玉蜀黍トウモロコシの粉で焼いたパンをくれた。弟と半分ずつ食べたがおいしかった。だが母は、自分は少しも食べなかったが、私たちがガツガツ食べているのを眺めながら、ただ嬉しそうに笑っていた。

そんな母の体が、だんだんと悪くなり弱ってきた。寒気、飢餓、そして心労が、重なり合つてのことだったが、何の病気だか分からなかった。しかし、母はそのころはもう極度に衰弱していたと思われる。

ある日、良い身なりをした私の知らない日本人の女

の人が来て、母と何か話し込んでいた。その人が帰った後、気が付くと弟の姿が見当たらなくなった。母に聞いても何も返事をしてくれず、私は悲しくなり涙が出て泣き続けた。三十何年後に再会するまで、弟のことが片時も忘れられなかったのは、こんな別れ方をしたからである。でも、どこかで生きてはいるし、また、会えるだろうと自分に言い聞かせていた。それでも、母を恨むような気持ちにはなれず、恨みことも言わなかった。

五、母の苦難と死

母は元来、体はあまり丈夫な方ではなかったのに、重なる苦勞と、食べ物も十分に食べられないので、余計に弱るのが早かった。子供を連れて、タンポポなどを摘んでおひたしにして食べていたが、それでは栄養はとれなかった。

ある日、母と市場に行ったら、いろいろな食べ物がたくさん並んでいた。その中においしそうなあめ玉があつて、私は、「あれが食べたい！」と母にねだつたが、母は「家にはお父さんがいないから、買うお金な

んかない」と言って、二人で抱き合って泣いたこともあった。その帰り道に、橋の下に人がうつ伏せになって死んでいるのを見て、お父さんではないかと思ひ、また、涙が出たことを覚えていた。

私たちの生活を見るに身兼ねた親切なある中国人の世話で、昭和二十一年の真冬のある日、母は私を連れて中国人の家に行き、そこで生活の面倒をみてもらうこととなった。

その家は三人家族で、やがて母はその家の長男と結婚した。しかし、その家の姑がとても意地の悪い人で、しばらくすると母をいじめられるようになった。そんなころ、私の祖母と叔母が家に来て、ここから出て一緒に日本に引き揚げようと勧めたが、この家では頑として許さなかった。どうしてもここから出たいならば、お金を出せと言ってけんかになった。どうせお金は出せないだろうと思つて強く言い出したのである。そんなお金はどこにもなく、祖母と叔母は、泣き泣き帰っていった。母と私がいつまでも泣いていたので、姑にひどくたたかれたことを覚えていた。

母は弟を手放したので、自分はとてもではないが、日本に帰れないとあきらめていたのではなかったかと思ふ。

春になったころ、中国政府から日本人の引揚げの問題で役人が来て、いろいろと調査があったが、調査員が来ると姑は、母と私を納屋の奥に押し込んで隠し、「この家には日本人はいない」と答えていた。結局、母と私は日本人なのに、日本に引き揚げられる機会を失ってしまった。

叔母も中国人と結婚して残留したので、母と私は時々その家を訪ねて、話し込んでいた。また、叔母もこちらの様子を見に来た。お互いの行き来が、最大の楽しみだった。

母はだんだんと衰弱して、中国の医者診断を受けて、鍼を刺したり漢方薬を飲んだりしていたが、その年の秋にとうとう死んでしまった。二十七歳であつた。

死んでも棺桶もなく、薄い有り合わせの板で箱を作って納めた。母は病氣、心労、絶望のうちに息を引

き取ったのだった。多くの中国残留日本婦人のなかでも最も悲惨な人生ではなかったろうか。息を引き取る前に私の手を握って、何か話したいようだったが、声が出なかった。ただ、その目が優しく、「悦子！強く生きなさいよ、弟を捜してね」と言っているように私には感じられた。

母の遺体は、すぐに冷たくなってしまった。見るに身兼ねて近所の中国人が、中国女性の着る長袍を掛けてくれた。私は、冷たくなった母に抱きついて離れなかった。母が死んでしまったら、これから先はどうして行けばよいのかと思うと、母から離れられなかった。野辺の送りしてもだれもこなかった。だれが知らせたのか、数日後に叔母が飛んできて、二人で抱き合って泣き続けた。

私は独りぼっちになってしまい、近所の子供たちから、「日本鬼子」、「日本人の子供」と言われて、いじめられて悲しい毎日を送っていた。泣きながら外を歩いていると、畑には野菜がたくさんできているのが見えた。つい数年前の両親が健在で開拓作業に一生懸命

だったころの、幸福な家庭生活を思い出して、また、涙が出た。

六、私の新しい生活

涙と、寂しさと、悲しきの交差する冬が過ぎて、タンポポの花が咲き出す春がきた。去年、母とタンポポを摘んで食べたことを思い出した。そんなころに、叔母が大勢の中国人を連れて、私を引き取りにきた。でも家では、私をかわいいからといって放さなかった。叔母は、「この子は、私の姉の子だ！」と、激しく怒鳴って、無理やりに私を連れ出した。それから私は、叔母の家に住むこととなった。叔母の夫は、王少清という人だったので、私は、王麗俠と中国の名前を付けられて中国人となった。

王家は十数人の大家族で、毎日の仕事が大変だった。この家でもいろいろな人がいて、いじめられたりもした。近所の子供たちからも、「日本人の鬼子」などと言われて、追い掛けられた。王少清は優しい人で、よく私をかばってくれて、私のことで近所の人とけんかをしていた。しかし、王家の祖母は意地の悪い

人で、それこそ名実共の「意地悪婆さん」であった。今、思い出しても、ぞっとするような気持ちになる。

私は、複雑な思いで気兼ねをしながら、実の父母の有り難さを思い出し、恋しくてみんなに隠れては泣く毎日だった。

昭和二十二年の夏、中国国内における内戦によって、経済が停滞し、工場とか商店などが次から次と倒産していた。瀋陽城内も混乱していて、王家の生活も大変になったので、一家は分散することになった。王家の祖父母と、王少清と、叔母と、私の五人が、王父の姉の住む河北省塘沽市に移ることとなり、瀋陽駅から約千キロメートルも離れた所で、瀋陽南駅から汽車に乗ったが、錦州まで行ったところで、線路の破壊があり徒歩で塘沽に向かった。かつて経験した避難の旅が、思い掛けずに再び現実となった。やっとの思いで塘沽にはたどり着いたが、ここでの生活も楽ではなかった。その家のじいさんと駅前で、水売りの仕事をしていた。あるときに、線路わきで休んでいたら知らぬ間に汽車が近づいてきて、汽笛を鳴らしたのでびっ

くりして転がってしまい、薬缶は壊れるし、水はこぼれてしまうし、そのうえに私は顔が切り傷だらけになったことがあった。

その後、天津に避難したが、そのうちに人民解放軍が勝利して、北京、天津、瀋陽などを解放し、平和が訪れたので、再びもとの家に戻った。瀋陽には母も眠っており戻ってきたことは嬉しかった。

七、学校生活

昭和二十四年九月に私は、瀋陽市内の和平区にある開明第一小学校に入学し、新しい教科書と新しい鉛筆をもらって本当に嬉しかった。九歳になっていた。叔母の長女、麗英が生後六カ月だったので、毎日その子を背負って子守りをしながら勉強していた。

十月一日には、中華人民共和国成立慶祝のお祭りがあり、初めてこの中国にも平和が訪れて喜びを味わった。毎日学校に行くのが楽しかった。三年生まではいつも上から三番目ぐらいの成績だった。でも、叔母には次々と子供ができて、生活も大変だったので、就職するつもりで五年生で卒業してしまっただけ。しかし、就

職するにはまだ歳が足りなかったので、一日中子守りをして過ごしていた。

ある日、叔母が一枚の古ぼけた写真を出して見せて、写真の中の一人の男の人を指さして、「これはだれだと思うか」と私に尋ねたが、私は分からなかった。すると叔母は、「お前のお父さんだよ」と言った。そして、「いつかはお父さんのところに行け」とも言った。しかし、その後は二度とその写真は見せてくれなかった。私の心の中では、「日本に帰りたい！お父さんに会いたい！」という思いが込み上げてきた。

住んでいた和平区には、日本人が多かった。日本の芸妓さんもいて、歌ったり踊ったりしていて、とてもにぎやかな所だったが、だんだんと静かになってきた。日本に引き揚げる人が増えてきたのだろうか。

家はその後、鉄西区の工場地帯に引っ越したが、叔母の子供が病気になる何カ月も入院したので、私は残された三人の子のお守りをして過ごした。

八、初めての就職

苦しく貧しい生活が、相変わらず続いているうちに歳月がたつていった。昭和三十一年、十六歳になって初めて就職することができた。就職先は、瀋陽市の皮革工場で、牛の皮を製靴用材料として加工する仕事だった。

仕事にもたいぶ慣れたころ、生皮を天日で干すため、二枚分ぐらいを担いで高い所に上がったが、そのときに誤って滑り、転落してしまい頭部を強く打った。すぐに診療所に行って診断してもらったが、幸いに大したことなくほっとしたが、後年やはりその後遺症が出て悩まされるようになった。それから、危険でない仕事場に回してもらった。そのうちにその工場での仕事がなくなってきた。昭和三十二年には農村に働きに行くこととなった。

遼寧省の青石嶺郷で、主なる仕事は豚の糞尿で肥料をつくる仕事であった。冬は寒い北風の吹く中で山に入り、薪をつくり、夜は、綿花の種むしりをした。陽気がよくなると畑に出て耕作もした。当番制で炊事も

した。朝は、玉蜀黍の粉で焼いたパンと白菜のスープ。夕方は、高粱米の粥と漬物と、一日二食主義だった。粗食だったが、楽しい毎日だった。

鉄西区出身の学生で、広有、朝信、成発、私の四人は仲よしで、助け合いながら楽しく過ごしていた。広有は、数年後に私の夫となった。

しばらく青石嶺郷で働いていたが、瀋陽に戻ることにした。しかし私は、皮革工場でけがをした後遺症があつて、頭痛や目まいの発作が時々あつたので、良い仕事に就くことができなかつた。家に戻っていたが言うにいわれぬ苦難な毎日であつたが、王家には多年、世話になつてきた義理もあるので、不平不満も言えず、簡単に飛び出すこともならなかつた。

昭和三十三年七月に、職業安定所で友達二人と紡績工場の採用試験を受けて合格した。三年間は見習い期間だが毎日働くことが楽しみであつた。二年目には、工場内のコンクールで一等賞をもらったこともあつた。

仕事は、工場内の各組の工員カードの集計や、給料

計算や、工場内の黒板に伝達事項を書いて回る仕事などだった。そのころは、王家を出て工場の寮に住むようになり、これまでの気苦労から逃れることができた。しかし二年が過ぎたころに、健康を害したのもう少し楽な仕事に移ることになった。この二年間は私にとつて今までにない楽しくよい思い出の期間であつた。

九、私の結婚生活

昭和三十五年五月に私は二十歳で結婚した。相手は、青石嶺郷で一緒に働いていた広有で、私より一歳年上で健康で誠実な人であつた。今までの辛苦な十五年と決別して、これからの幸福な人生を願つた。結婚式にも喜んでくれる肉親はいなかつたが、職場の友人や近所の人々が祝福してくれた。叔母は病気で入院していたが、子供三人が祝いに駆け付けてくれた。

これまで知らなかつた平和な日々を過ごし、一年後には長女が生まれ秀春と名付けた。

そのころから中国は経済状態が悪くなり、工場も仕事がないので大勢の者が失業するようになった。悪い

ことは重なるもので食糧危機にもなって生活していくことが大変だった。子供連れで働きに出ることもならず、昔を思い出すような苦しい毎日を過ごしていたが、そんな中で翌年には、長男慶春が生まれた。

夫は、瀋陽のポンプ製造工場に勤めていたが、いろいろと頼み込んで私もそこで一緒に働くこととなり家族工員となった。それから十三年間、その職場で勤務をした。その間に次男をもうけて三人の子宝となった。

文化大革命のころが一番つらかった。中共の軍人が、私が日本人であることを知っていろいろと、こと細かに調べにきた。父母が開拓団にいたことや、開拓団の内部のことや、敗戦後の行動などについて聞いていたが、私は知っていることは正直に話したが、四、五歳のころのことであり相手が納得するようにには答えられなかった。子供たちは、頭の髪を刈って丸坊主にし、家の周りの立木や草花もみんな切りとり、質素な生活をしていることを見せた。幸いに、夫も私も引きずり回されることはなかった。

十、姉弟の再会

昭和五十年に叔母は単身で日本に一時帰国をした。私も誘われたが、子供もいるしお金もなかったので断った。その叔母が日本に帰る手続きのために、自分の母（私にとっては祖母）に手紙を出した。その返事の中に、父がシベリア抑留から無事に帰国をしていたことが分かった。そして父からも私に手紙がきて、「弟を捜せ」と書いてあった。私も随分と心に掛けていたし、友達にも事情を話したらみんな協力してくれた。

以前、工場と一緒に働いていた友達から、「隣の人に、日本人だった人がいる」と知らせくれた。私は、何となく予感がして、もしかしたら弟ではないだろうかと考えた。前と異なって大都会となったこの瀋陽の市内で、三歳で別れた弟を見付けたことは大変なことだと思っていたが、それでも一日でも早く会いたいものと、朝夕に心の中で母に頼んでいた。叔母にもそのことを話して、持っていた昔の家族の写真に手紙を添えて、その家に持っていった。また、友達にも

さらに協力してもらい、方々から調べてくれた。

父からの手紙の中に、弟は、幼児のときに脱腸になり佳木斯チヤムスの陸軍病院で手術をしたので、そのときの疵痕があるはずだ。もしあれば弟に間違いはない、と書いてあったので、そのことも手紙に書いた。

その後も、何回となくその家に行って話をしたが、育ててくれた養母に遠慮したのか、はっきりとしたことは答えてくれなかった。

一時帰国から戻ってきた叔母に、今までのことを話した。再び叔母と一緒にその家に行き、そこで真実の話し合いをした結果、お互いに認め合ってやっと、姉弟の名乗りを上げた。亡くなった母が、ここまで導いてくれたのだと思うと涙が止まらなかった。初めて姉弟で抱き合った。

四月五日は、中国では清明節である。その日、姉弟で母の墓に行ってお参りをした。そのときに墓の前で、弟は、「自分の日本名は、蕉だ」と言っていて、大きな体から大声を出して、「母さん！ 母さん！」と言いながら泣き続けた。私も一緒に泣いた。母はどんな

に喜び、安心したことだろうか。

三十数年ぶりの姉弟再会であった。あのときの感激は、今になってもしっかりと頭の中に残っている。

十一、一時帰国

叔母が一時帰国から帰ってきて、日本の様子や、福島の家のことなどをいろいろと話してくれた。父からも一度帰ってきたらという連絡もあったので、里帰りの手続きをしたが、許可の下りるまで二年ぐらいかかった。やっとの思いで許可が出て、昭和五十三年七月に生まれて初めて、飛行機なるものに乗って成田空港に着いた。五歳になった次男の樹春だけを連れて行った。

空港には五歳のときに別れたきりの父や、義理の弟をはじめ多数の人々が出迎えていて、びっくりした。樹春は、前から教えていたとおりに、日本語で、「おじいちゃん！」と言って、父を喜ばせた。私は、緊張していたのか涙も出ずに、ただ、父と抱き合った。成田から車に乗って、福島の家に着いたのは夜中になっていた。三十三年ぶりの父子対面は、やっと実現し

た。今日までのことを思い起こして感無量であった。

翌朝、家の周りを歩いたが、緑一面の山と畑で中国の景色とは、全然、異なっていた。庭先には色とりどりの花が咲いていて、天国にきたような気持ちになった。

それからの数日は、村役場、市役所、県庁などへのあいさつと、滞在手続などで目の回るような忙しい時間を過ごした。叔父や叔母の家からも招かれて、歓迎せぬにあい、緊張と疲労で体調を崩してしまった。

そんなときに一緒に一時帰国した、鹿沼市の大場君子さん母子が、そのお父さんの運転する車で私を訪ねてきた。そのお父さんは、私の父と同じくシベリア帰りだ。そのお母さんも中国で死亡し、私と境遇が似通っていた。頼っていたお父さんは、他家に婿入りしていて子供も何人かいる、複雑な家庭環境で、君子さん母子の安住する場所はなく、ストレスがたまり病気になってしまい、私に会いたいということで訪ねてきたのだった。二人は抱き合って、中国語で叫びながら泣いて慰め合った。中国残留日本人の共通の運命的悩

みであった。

涙ながらに話し合っていたら私が、天地がひっくり返るような腹痛が起きて七転八倒した。驚いた君子さんのお父さんが、すぐに私を車に乗せて近くの病院に運んでくれた。診察した院長も、よく分からないようだった。私は苦しい中で、「実は以前にもこんなことがあった。腹にいる蛔虫が胆のうに入って苦しんだが、そのときと同じ痛みだ」と言ったら、院長は笑いながら、「今どき、蛔虫なんか、いるものか」と、他人ごとのように言っていた。君子さんのお父さんは、「この人は中国から帰ってきた人で、中国では腹の虫はまだまだたくさんいますよ」と話した。院長は、事情が飲み込めたよう駆虫剤を探して飲ませてくれた。

翌朝、一握りの蛔虫が固まって出てきて、痛みはけろりと治まった。二日ばかり入院したが、父には付き添い兼通訳で随分と心配をかけた。しかし、他の人とは言葉がうまく通じないので話をする事ができずに、私にもストレスがたまってしまった。樹春は、怖

いものなしで病院内を走り回っていて、お菓子をも
らったり、おもちゃを借りたりしてご機嫌だった。片
言の日本語も話すようになっていた。

数カ月後、今度は手足がしびれ出し意識を失って倒
れた。救急車ですぐに病院に運ばれたが、診断は癲癇
発作であった。いろいろと聞かれたが、十六歳のとき
に瀋陽の皮革工場で作業中、事故で頭部を強く打った
ことがあったが、そのときの脳内出血が残っていて、
その後遺症とのことだった。父や義弟たちは、忙しい
農作業の合間に、車で観光旅行に連れて行ってくれる
が、その後遺症のために車酔いがひどくて、あまり楽
しくはなかった。

夢にまで見ていた帰国だったが、いざ帰ってみると
それぞれの家庭にも、それぞれの生活や事情があり、
必ずしも私の期待していたとおриではなかった。実家
では終戦前に国の要請に応じて、開拓団とか、義勇隊
とかに行っていた人が多かったが、みんな命からがら
やっと帰国して、今の生活を築きあげてきたのであつ
て、そこに私たち親子が入り込む余地はないようだつ

た。

一時帰国の滞在期間六カ月も、たちまち過ぎようと
していたので父と相談して、あと半年の延期を申請し
た。その半年もいろいろのことがあって、必ずしも落
ち着いた生活ではなかった。中国に残した夫や子供か
らは度々手紙がきて、もう中国には戻ってこないの
か、帰ってこないと困るなどと書いてあった。樹春も
里心がついて、「もう帰ろうよ」と言い出した。

しかし私は、今度中国に戻ったらもう父とは会えな
くなるだろうという気持ちが先に立っていた。約一年
の滞りも夢のごとく過ぎて昭和五十四年の七月に成田
空港をたった。もうこれが祖国日本の見納めかと思つ
と、切ない気持ちになった。

しかし、瀋陽に帰ると家族や大勢の友人が、歓迎し
てくれた。

日本から持って帰ってきたいろいろな土産物に対し
て関税をたくさんとられて、父からもらってきたお金
は、たちまちなくなってしまった。

私が戻ってしばらくしたら、今度は弟の薫一家が日

本に行くと言い出した。ようやく姉弟再会したのに弟が日本に行ったら、また、叔母と私の二人だけが残留することになり、大変なショックだったが、弟の幸福を願って送り出すことにした。

昭和五十七年二月に、弟は養母と五人の家族を連れて日本に向かった。間もなく叔母も再び日本に渡った。今度こそ真正正銘の一人になってしまった。でも、私にはやはり家族が大切だった。

瀋陽にはまだたくさん残留日本人がいたが、日本が復興し経済的にも好景が続いているということを知ってからは、次々に帰国してしまっ、残留日本人は数えるほどしかいなくなった。

十二、永住帰国

周りがだんだんと寂しくなってくるにしたがって、私は家族と相談し、「日本は平和で、自由で、住みよい所だから全員で日本に移ろう」と言っ、いろいろ説明した。家族も賛成して永住帰国することを決心した。父にも相談して、許してもらった。早速に手続きをとり、平成三年六月にまず、夫と、義母と、樹春

と、私の四人で日本に永住帰国をした。

埼玉県所沢市にある、「中国帰国者定着促進センター」で、三カ月間の講習を受け日本語と日本の生活習慣について勉強をして、郡山に移った。その翌年には長男夫婦とその子供を、また、さらにその翌年には長女の家族三人を呼び寄せて、全家族十人が、郡山で生活することとなった。先に帰国した弟の薫一家とも近い所に居を構えた。

就職や収入は思うようにはならなかったが、それでも引揚者連合会などの支援団体や、ボランティアの人たちのおかげで、何とか生きてきた。ぜいたくはせずに、質素な生活を続けているが、やはり日本に帰ってきてよかったと思っ、日本語や、日本の生活習慣に慣れてくると子供たちは、それぞれの好きな道に進んでいった。私たち立花一家は、十数人が中国で命を亡くし、今日のこの日本の平和の礎となった。

今、私にできることは、その人たちはじめ他の多くの人々の冥福を一生懸命に祈ることと、再びあのよくな悲惨なことが起こらないように、平和の尊さをみ

んなに話すことだけです。

私は、この六十年の間に人間として、「悲、歎、離、合、喜、怒、憂、思、哀、恐、驚、酸、甘、苦、辛、感」のすべてを体験した。運命に翻弄された大半生といっても過言ではないだろう。

ただ、中国にいる間に、大変に親切にもらった人々に対して、何の恩返しもできなかったことだけが心残りである。

中国残留日本人問題が解決しない限り、あの日中戦争は、まだまだ終わっていないのである。

赤峰から引き揚げてきて

福島県 渡辺 モト

一 夫と共に

私は大正十二（一九二三）年三月九日、福島で高橋友吉の四女として生まれた。幼時はお人形さんのようにかわいいと言われ、家を買う物に来るおじさんに肖

像画を描いてもらったほどであった。昭和十四（一九三九）年に福島女子師範学校一部に入学し、十八年に本科を卒業、さらに十九年専攻科を卒業した後、隣村の玉井村小学校に訓導として赴任した。女子師範学校の校長先生が卒業式の訓話で、「今は戦争のために日本国内には男子が少ないので、あなた方は朝鮮にいる人であろうと満州にいる人であろうと日本男子のお嫁になってほしい」と言われたのをよく覚えていた。私は素直な気持ちで、国外に出ても日本男子のお嫁に行くのが当たり前のように思うようになった。

ある日、玉井村馬場の渡辺喜市氏から、満州で働いている次男、渡辺夫さんの嫁に是非、と申し出があった。喜市氏は学務委員で、常に校長室に入入りしていたし、校庭を借りて馬術の訓練などもしていたから、私の人柄も何もかも分かった上での申し入れだと思っただけ、私には、まだ一度も会ったことがない人との縁談に戸惑う気持ちがないわけではなかった。しかし、父の友人からも、渡辺喜市氏からは非息子の嫁にもraithたいと強い希望があったことを伝えられ、この縁談